# Ur「王墓」の被葬者は王か，聖なる結婚の主演者か[1)]

小野山　節

## 1　Mesopotamia における「王墓」の初発見

第一次世界大戦後，その政治的優位によって急に活発になった欧米列国の近東における発掘調査は，まもなく，古代 Orient 世界の再現に大いなる成果をあげた。なかでも，Egypt における Tut-ankh-amen の陵墓と Mesopotamia における Ur の「王墓」の発見は壮観であった。Tut-ankh-amen の陵墓は，Carnarvon 卿と Howard Carter とが数年間を費しておこなった異常な努力による探索の結果，1922年に発見されたものであり，Ur の「王墓」は C. L. Woolley を隊長として1922年に開始された英国博物館とペンシルバニア大学博物館との合同調査によって，Tell el-Muqayyar すなわち古代都市 Ur の聖域付近から，1927年に予想を越えて発見されたものである。

この二つの発見は，同じょうに，ジャーナリズムの世界ではもちろんのこと，学界においてもひじょうにセンセーショナルに報道されたけれども，それぞれの発見の意義はまったく違っていた。というよりむしろ，お互に相反する性質のものであったという方が，いっそう適切な表現であるかも知れない。すなわち Tut-ankh-amen の陵墓は Egypt の王陵のなかで，未盗掘のままで残っていた唯一の例であったことによって，その発見は，陵墓における埋葬方法の詳細はいうに及ばず，当時の王宮における日常調度の種類や形式について実物の資料を提供したばかりでなく，盗掘によってすでに残骸となっていた，かれの先任者あるいは後任者たちの陵墓に，豊かな肉付けをし，暖い血を通わすことに大いに役立ったのである。

これにたいして，Ur における「王墓」の発見は，神殿跡と Ziggurat の廃墟とが顕著な遺跡であった世界において，世俗的な王のために造営された墓という，まったく新しい性格の遺跡が登場する結果となった。それは，これらの墓から，金，銀，玉製の豪華な副葬品が大量に発見されて，紀元前3000年頃においても，Mesopotamia の文化が

予想外に高かったことが認識せられ， Mesopotamia の方が Fgypt よりも早く文化が開けたのではないかという考え方も[2] 可能となって， Egypt を中心とする文化一元論に反撃の材料を提供したばかりではない。これを王墓と認めることは，その当時に理解されていた Mesopotamia 文明の性格について，根本的な再検討を要求し，必然的にこの修正を余儀なくさせるほどの大事件であった。

したがって，「王墓」の発見が報道されると，直ちに，この Woolley の仮説への異議が提出され[3]，新発見の意味が重大であるだけに，両説相譲らず，断続的ではあるけれども，1923年いらい30数年のあいだ，この「王墓」の被葬者をめぐって論争が続けられてきた。そして，現在でもなお，結着が着きかねている状態である[4]。すなわち，王墓であることを否認する論者は， Woolley が王墓と認めた内容をもって，新年豊饒祈願祭のとき，神聖な神の結婚式において神の代理人を演じたものが埋められた儀式の跡であると考え，しかもこう解釈する方が Mesopotamia 文明の他の諸要素ともマッチすると主張するのである。

このような重大な論争の契機を提供した「王墓」とはどのような内容のものであろうか。発見当初の事情から，その内容を探ってみよう。

Woolley は，1927年の初めから，都市の中心にある聖域の東南部で墓地の発掘をはじめた[5]。短期間の発掘で多数の墓が発見された。かれはこれらの墓を3時期にわけて，Ur 第一王朝以前から Sargon 時代にいたるまでのものと推定した。そして墓の構造に二つの主要な型式，すなわち陶棺による埋葬とマットにくるんで直接うずめたものとが，この3時期を通じて認められた。そのなかに3基の特異な墓，337号墓，513号墓，580号墓があった。337号墓と513号墓には練土壁が認められ，580号墓には人間の遺骸の痕跡がないのに，細金細工の鞘をもつ黄金短剣をはじめ多くの優品が収められており，さらに牛の骨も発見された。この墓の発掘は未完成のままで，したがって，初めて発見された特異なこれらの副葬品の意味も不明なままで，このシーズンは中止された。

次のシーズンの発掘[6] が1927年10月に開始されると，Woolley は直ちに580号墓の清掃にかかり，さらに優品を掘りだした。ついで発掘に取りかかった777号墓において，この種の墓が「王墓」'Royal Tomb' ではないかという着想を初めていだくにいたったのである[7]。777号墓は，6.50×6.35 m の大きな竪壙の底のほぼ全域に，2室からなる墓室を石灰岩で構築したもので，竪壙の上面には，祠堂の床に敷いてあったと思われる石灰が認められた。墓室の北東壁と竪壙とのあいだから遺骸3体が，東隅につけられた壙道から槍をともなった遺骸1体が発見された。墓室は天井に穴をあけられて，

盗掘をうけていたけれども，方形の主室には，この墓の被葬者が中央に横たえられており，四周の壁にそって随葬者3体が認められた。このほかに銅利器類，銀製および銅製の容器類，土器などの副葬品があった。長方形の副室からも，装身具をつけた遺骸4体が各種の利器や容器とともに葬られていた。装身具の発見状態から推測すると，被葬者は女性であった可能性もある。

この葬法は他の大多数の墓の場合とは明らかに異なっていた。大部分の墓はごく簡単で，比較のためにその構造の大要を記すと次の如きものであった[8]。まず，大きさが2.0×1.5 m ばかりの長方形の小さな竪壙をほって，底に葦製のマットを敷き，竪壙の一側にそって屍体を安置する。もっとも貧弱なものでは，屍体はマットで包まれているだけであったらしいが，編物とか，木製あるいは陶製の棺に収めたものもあった。棺内またはマットの中に，屍体とともに装身具があり，両手の間には，土器，石製あるいは金属製のコップが1個あった。竪壙の残余の部分には，副葬の容器，利器，そのほか来世に行くために必要と思われるすべてのものが収められていた。棺と副葬品の上を全面にわたってマットで覆い，竪壙の上面まで土を埋めてあった。この埋葬法は，個々のものの細部に多少の差異は認められても，この墓地が使用された全時期，すなわち Ur 第一王朝以前から Sargon 王朝時代までのあいだ，基本的にはほとんど変化していないのである。

はじめに発見された337号墓と530号墓は，このような大多数の墓とは違った構造をもちながら，「王墓」の一部分にすぎなかったために，その性格がよく理解できなかった。Woolley によると，777号墓のような構造の墓は，従来，まったく知られていなかった種類のものであったけれども，発掘が進むにつれて，決して珍しいものではなくなったという[9]。このシーズン中に確認された約300墓のうち4基が「王墓」と考えられたものである。それは前に述べた777号墓と引続いて発見された779号墓，789号墓，800号墓であって，Woolley は，「王墓」の名に値する墓の共通な特徴として，次のごとき諸点をあげている。

「王墓」[10] は約 12×9 m くらいの長方形の大きな竪壙であって，その一側に壙道がつけられており，竪壙の底に石灰岩か煉瓦で墓室が構築されている。被葬者はそのなかで木棺に収められるか，あるいは棺台の上に安置されている。墓室内に従者が，墓室外の竪壙に兵士や廷臣，男女の召使たちの犠牲が認められた。普通の埋葬では，死者1人にたいして少くとも1個のコップは必ず持たせてあったのに，これらの犠牲はそれさえ持っていない。しかも墓室のある墓に限って人間の犠牲が認められた。Woolley は，こ

のように宮廷の従者たちを従えて葬られている姿こそ，王の名にふさわしいものであると強調し，王が人間の犠牲をともなっている意味を，王が神性をもっていたであろうと推測することによって説明しようとしたのである。

## 2　「王墓」の被葬者をめぐる論争の展開

この1927～1928年のシーズンは，「王墓」という，まったく新しい遺跡の発見でもって輝やかしい成果をあげたのであるが，その内容が概報の形で発表されると，この「王墓」という命名にたいして，直ちに反論が提出された。最初に反対を唱えたのは Sidney Smith であって，かれは次のような反対の理由をあげている。これらの墓が王を埋葬したものであるという証拠はない。一方，Sumer 人が来世の存在を信じていたと考えられないし，さらに多数に及ぶ人間の犠牲は豊饒を祈る宗教的儀式いがいに説明の仕方がないものであるから，これらはむしろ，豊饒を祈願する祭において，神と女神との役割を演じた代理人を葬ったものと考えられるというのであった[11]。2年後には，F. M. Th. Böhl が，「王墓」といわれる墓のうち，被葬者の性別が明確に判定できたのは女性だけであるという証拠をあげて，この種の墓はすべて，豊饒祭のときに，聖なる神との結婚の相手にえらばれた女司祭を葬ったものという，Smith の説によりながら，補足的に修正した新見解を発表した[12]。このようにして，この論文で問題にしようとする，「王墓」[13] の被葬者が何者であるかをめぐる論争が始められたのである。

どのような証拠によって，Smith が被葬者を神の代理人と考え，あるいはまた Böhl が女司祭であると主張したかについての具体的な内容は後で詳述することにして，この両説が発表されてから今日にいたるまでの論争の経過について簡単にふれておきたい。

Woolley は，1934年に出版された Ur の「王墓」をふくむ墓地の報告書において，Smith ならびに Böhl の主張の根拠が，Ur の墓地で認められた事実に反する点があることを指摘し，さらに，概報においては傍証ていどにしか取りあつかっていなかった，lugal（王）または NIN（王妃）の称号をもつ名前が，王墓から発見された円筒印章のなかに認められる事実をあげて，これらの墓が王墓である可能性が十分にあることを強調した[14]。

しかしながら，この報告書にかんする書評でも，Woolley がこの墓地の年代を古く考えすぎていることへの批判とならんで，被葬者が王か聖なる結婚式の主演者かという点がとくに問題とされた。E. A. Speiser は Smith の説に賛成し，さらにその主演者すなわち「王墓」の被葬者が司祭と女司祭であるという新しい解釈をくだし[15]，H.

Frankfort も[16] また，基本的には Smith いらいの説に賛成しながら，男の主演者は疑似王 mock king としての性格をもっていたのではないかという新仮説を提出した。この見解は1948年に出版された，古代 Orient の神々と王権にかんする総合的な著作，Kingship and the Gods においても，Assyria 時代の儀式と関連づけながら，いっそう詳しく述べられたけれども[17]，Woolley ならびに王墓説を支持する学者を納得させることはできなかった。

一方，ドイツにおいては，1947年に両説を結合したような新見解が Anton Moortgat によって提出された[18]。かれの考え方は，Ur の「王墓」において，被葬者の性別が分るものはすべて女性であり，その他の墓は，全部が墓室の天井に穴をあけられているか，墓室を破壊されているという事実を基礎にしている。Woolley はこれを盗掘によるものと考えたし，一般にはこの解釈が妥当なように思われているが，Moortgat の解釈では，この穴は埋葬されたものが，後に運びだされた跡であって，それは Tammuz[19] の復活祭のときに行われたものであり，ここにかつて埋葬されていた主は現世の王であったという。王を被葬者と想定したことは司祭説と対立するように思われるかもしれないが，Tammuz の復活祭は新年豊饒祭の中心をなす行事であるから，この考え方は，従来の「王墓」司祭説と相反するものではなくて，むしろその内容をいっそう具体的に考求した結果であるということができる。しかしながら，これらの「王墓」に葬られた者が現世の王であったと考えられていること，そして，この埋葬法が Sumer 人の死にたいする考え方を示すものとして把握されている点は，従来の司祭説とは異なる重要な新解釈といわねばならぬ。これは従来の司祭説，あるいはこれに類する見解をもつ学者とはまったく異なる点である。したがって，この場合には，被葬者が王か神の代理人かという問題の外に，被葬者の半数すなわち男神の代理人が「死者であったか仮の死者であったか」という問題が新しく提起されたことになる訳である。この解釈が発表されていらいドイツの学界では，この説を信奉する傾向が強いようである[20]。

しかし，この新解釈も Woolley をはじめその他の王墓説をとる学者たちを説得するには至らなかった。Woolley は 1954 年に Ur の発掘にかんする総括的な概説書として Excavations at Ur: A Record of Twelve Year's Work を出版し，新しい証拠は提出していないが，ふたたびこの問題にふれ，新年豊饒祭の主演者が生贄にされたという考え方が誤りであり，王墓と考える方に妥当性があることを改めて強調している[21]。

1927年に「王墓」が発見されていらい，古代 Orient 文明の研究者たちが，この問題についていずれかの立場を表明することになったのは当然である。筆者の目にふれたも

のだけでも，王墓説をとっていた，あるいは現在でもそう考えている学者には，Woolley のほかに，W. J. Perry, V. G. Childe, G. Contenau, L. Delaporte, W. Speiser, S. A. Pallis, C. J. Gadd, A. Parrot, S. Moscati, S. N. Kramer[22] などがあり，神聖な結婚の主演者説の系統をひく学者には，Smith, Böhl, O. Menghin, H. Frankfort, S. Lloyd, E. A. Speiser, A. Moortgat, H. Schmökel, M. A. Beek[23] などがある。

このように多くの学者が意見を述べているけれども，かれらの見解は，それぞれが異なった証拠と独自の考え方によって支えられているものではなく，単にどちらの考え方に賛成するかを表明しただけのものが大部分であるので，全部について問題にする必要はない。王墓説では前述の Woolley があげた根拠いがいの理由をのべているのは Perry と Childe だけであって，かれらは Mesopotamia における王墓の成立にかんして Egypt からの影響を想定している。その外の学者で，賛成の理由を具体的に示したものはほとんどない。

聖なる結婚の主演者説を主張する学者にあっても，Menghin は Böhl の見解により，Lloyd は Smith, Böhl, Frankfort の説に，Schmökel, Beek は Moortgat の見解に賛成しているだけである。Speiser と Frankfort は Smith あるいは Böhl の考え方に賛同の意を表しながらも，新しい解釈を取っている。したがって，この論文においては，主として Woolley, Smith, Böhl, Frankfort, Speiser, Moortgat の諸見解を問題にしようと思う。

ところで，Ur「王墓」の被葬者を，神聖な結婚の主演者と理解する学説は，Smith, Böhl の提唱から Moortgat の Tammuz 信仰説にいたるまでの過程をみると，次第に一つのまとまりを取ってきているように思われる。換言すれば主演者が生贄にされる場面と儀式の一部について，新説は前説よりさらに具体的な説明を与えようという試がなされ，この説明による限り説得力が備わって，尤もらしくなっている。これは学説の発展として当然のことであるけれども，それらの説明を発掘において認められた事実と対応させて検討してみると，説明が具体的になればなるほど，遺跡における事実との隔りが大きくなっていることを感じる。このような疑問の余地のない事実を曲解した説明が行われているにもかかわらず，現状では Tammuz 信仰説が相当に有力な考え方として受容されているので，まずその誤解を指摘し，次いでそのような間違った解釈が提出されるにいたった原因にまでさかのぼって，「王墓」の被葬者が神聖な結婚の主演者であるという考え方の成立しがたいことを述べてゆくつもりである。

この場合，これらの諸見解を，従来のように司祭説と一括してしまうことは，その内

容の正しい理解を妨げるばかりでなく，問題の解決をいっそう困難にしている面が少くない。被葬者を聖なる結婚の主演者であると考える点では，Smith と Böhl は同じであるが，Smith は男神と女神の代理を演じた男女がそれぞれ生贄にされたと考えているのにたいして，Böhl は神の代理を演ずるのは司祭と女司祭であるけれども，女司祭だけが生贄にされたと考えている。このことは新年豊饒祭の内容にかんする解釈が違っていることを意味する。前述の紹介からもわかるように，反王墓説はこの二つの系統にわけうるように思われる。Smith は神の代理を演じたものが司祭と女司祭であるとは言明していないけれども，E. A. Speiser に至って司祭・女司祭という解釈に到達しているので，Smith を始めとするグループには司祭・女司祭説の名を冠する。したがって Böhl の系統は女司祭説ということになるが，Moortgat の場合には Böhl とは違って Tammuz 信仰による解釈を前面に出しており，またそれが独創的な面でもあるので，この両者はそれぞれ別個に取り扱うことにする。

以下において，Ur の「王墓」が王と王妃のものであるか，聖なる結婚式の主演者であるか，あるいは一時的に王が Tammuz の代理として葬られ，復活して運びだされた事実が認められるかどうかについて検討する訳であるが，この問題を取りあげるのは，世界中の著名な Assyriologist その他の学者が多数参加してなお論争中であるこの大問題を，一挙に解決できるような新事実が発見されたからではない。先に「Mesopotamia における帝王陵の成立」と題する論文[24]において，王墓の構造の変化から，王の歴史的性格の変化を考察したときに残しておいた宿題を，ここで果したいと思う。もし，Ur の「王墓」の被葬者が聖なる結婚の主演者であることが認められるならば，先の考察は無意味なものになってしまうからである。また欧米の学界では，反王墓説の方がむしろ有力であるとみられるが故に，なおさらこの問題を無視することは許されないのである。ここで私自身が王墓説に賛成する理由を明示しておきたいからである[25]。

## 3　Tammuz 信仰説批判

Anton Moortgat の Tammuz 信仰説は，後で述べる Böhl の女司祭説と同じように，女性を埋葬した墓が攪乱されていない事実をとくに重視することに，その説の成立の根拠をおいているように思われる。しかし，かれの場合には，Böhl とは違って，すべての「王墓」に女司祭が葬られたとは考えない。そして女性が葬られている 800 号墓を 789 号墓にならべてつくってあること，さらに 789 号墓の天井に穴があけられている点に重要な意味を認め，これを対墓 Doppelgruft[26] と解釈して，これが Tammuz 信

仰にもとづく新年豊饒祭の神聖な結婚式の跡であり，しかもその典型的な例であると主張する。ここで問題にされている Tammuz 信仰というのは，要するに復活の思想であって，789 号墓は王が神 Dumuzi として象徴的に死を装って一たん葬られ，のちに復活蘇生して運びだされたとき，天井に穴があけられたものであり，800 号墓は女神 Inanna の代理者の女司祭あるいは王妃が，王の仮の埋葬にともない，死者になって葬られたものであるというのである。

この Moortgat の説は，日本ではほとんど紹介されていないので，少し長くなるけれども，この説の根拠を要約した形で紹介しておきたい。

789 号墓の墓室は天井に穴があけられているのに，800 号墓はそのような痕跡がまったくなく，墓室のなかには女性が葬られていた。Woolley はその穴を盗掘によるものと考えたが，Moortgat はこの解釈に疑問をもち，墓室内に銀製のボートや象嵌細工の遊戯盤というような，盗掘者にとって目につく高価なものが残されている事実を重視して，これは墓が盗掘にあったのではないことを示すものであり，墓室の天井の穴は被葬者がここから抜けでた跡であろうと推定した。そして，この推定をよりどころとして，789 号墓と 800 号墓で発見された諸事実を詳細に検討してみると，これらの「王墓」が Tammuz 信仰にもとづいて営なまれたものであることがよく分るという。その証拠として，次のような事実をあげている。

789 号墓の墓室の上にある 800 号墓の死坑において，その墓室の天井にあけられた穴を覆うような形で，木の痕跡が認められ，そのまわりから，儀式のさい祝宴に使用される類の器具一式が発見された。大量の器具があったなかで，金製，銀製，石製の杯，皿などを含む容器類，銅鍋，濾器，灌奠用器，銀製の吸管などがとくに目立っており，一つの大きな凍石製容器のなかには銅製の錐，鋸，鑿がいれられていた。またそのすぐ近くから金製の鋸と鑿とが発見されている。吸管は銀の吸口をつけ，さらに金と lapis lazuli 製の環装飾をもつという儀式用器具にふさわしいものであり，杯にも新年祭の使用に似つかわしい，縦に凹面の溝をつけた優品があった。

このような事実，すなわち祝宴に使われる器具類が大量に揃って発見されるということは，789 号墓の天井に穴をあけ，被葬者をもちだしてのちにその場で祝宴が催されたことを示しているように思われる。それにもまして重要なのは，金の鋸と鑿とがこの穴の付近から発見されている事実であって，これは墓室の天井に穴をあけるために，この種の道具が使用されたことの表徴であると解釈されている。

また，このような対墓の例は 1050 号墓と 1054 号墓においても認められる。ただし，

この2墓においては，対となる埋葬は上下の関係でおこなわれていると解釈している。説明の便宜上，1054号墓を先に取りあげると，この墓壙の上部の墓室は，その上半が破壊されており，なかに残っていた木箱から発見された円筒印象の銘によって，被葬者が王 Mes-kalam-dug であることがわかるという。一方，下半部の墓室は未盗掘のまま残っていて，しかも被葬者は女性であった。

1050号墓の場合は，構造の大要は1054号墓と同じように，同一の竪壙で上下にわかれているが，上下それぞれの状態は1054号墓とまったく違っている。1050号墓は竪壙の最下層に土器片と焼灰の層があり，そのうえに40体をいれた死坑があって，厚い墓床でもって覆われていた。この墓床上に木棺と数個の容器があって，容器群のなかから，「A-kalam-dug, Ur の王，A-šu-sikil-AN，かれの妻」という銘のある円筒印章が発見された。そのうえは厚い墳物の層であって，さらに上が1054号墓の上半部とほぼ同じ構造になっている。ただしこの場合には，木棺による埋葬は認められず，壁で4区劃に区別されていて，その1室から多数の犠牲者と動物の遺骸が発見された。この下半部に墓室がない理由を，Woolley は完全に盗掘され破壊されてしまったものと説明したが，Moortgat はこれを復活の儀式によって取り払われたものと考え，そして上半部のものを女性が葬られていた対をなす墓室であると主張する。この女性を葬った筈の墓室が破壊されているのは，後世の埋葬のためだという。

さらに他の「王墓」の状態をみても，777号墓，779号墓，1236号墓は墓室の天井に穴があけられており，580号墓，1232号墓，1237号墓，1332号墓では，墓室が完全に消滅しているけれども，竪壙には殉葬者とともに多くの貴重な副葬品が残されている。盗掘者が多くの努力を払って墓室に穴をあけ，せっかく忍びこむことができたのに，貴重なものを残したままで置きざりにしたり，あるいは貴重品を持ちさらずに墓室を破壊してしまうことがあるのだろうか。そういうことはありえない。したがって，墓室が荒されているように見えるのは，盗掘によるのではなくて，儀式上の意味をもって再開された跡であるという。さればこそ，貴重品が破損された墓室とともに残りえたのである。そしてこのような埋葬法がさらに発展すると，Ur 第三王朝の諸王の陵墓といわれる建造物の形をとるというのである。

Ur 第三王朝の諸王の「王陵」は，いわゆる「王墓」を含む墓地の北東部にある。Moortgat いぜんの反王墓説の論者たちは，「王墓」の性格をこの「王陵」との関連において説明しようとはしなかった。この「王陵」の構造が明確にされたのは，1930～31年の発掘においてであり，発掘の結果が公表されたのが The Antiquaries Journal の

1931年10月号（Vol. XI, No. 4）であるから，この発見の前に発表された Smith と Böhl の説明に，この「王陵」についての所見がみられないのは当然のことであるが，Woolley が「王墓」を Ur 第三王朝の「王陵」と関連づけて，王墓説の妥当性を強調していごにも，王墓説に反対した Frankfortや Speiser がこの点を無視したのは，明らかに怠慢であった。Moortgat が反王墓説の立場からはじめて，「王墓」とこの「王陵」との間には密接な関係があることを認め，この「王陵」といわれる建造物もまた Tammuz 復活祭の儀式に使用されたものであると主張した。そして建物の構造の各所にその特徴が認められることを指摘している。この「王陵」を使用した人物は，その年代の隔りからいって，いわゆる Ur の「王墓」の被葬者と直接的な関係があったとは考えられないけれども，この「王陵」の性格をいかに理解するかによって，「王墓」の被葬者の社会的役割にたいする評価もとうぜん違ってくるべきもののように思われる。そのような重要な意味をになっている重要な遺跡である。

この「王陵」は，住居のプランをもつ中央の建物が主体で，その東隅と西隅とに，同様なプランの小さな建物が増築されたものである。中陵と東陵は地下にそれぞれ墓室を2室もっているが，西陵には3室ある。この建造物は個人の住宅と同じプランをもっているけれども，対角線が四方に合致し，外壁が扶壁でかざられており，さらに装飾的な造りの入口，祭壇，中庭にある方形の台，小部屋の供物台，金と lapis lazuli の装飾品などがあって，この建物が神聖なるものであったことを示している。そして墓室のうえにある部屋から墓室の天井にいたるまであけられていた穴は，埋葬されたものが復活して持ちだされ，上部の新しい住居に移住したことを示す跡であり，このような建物の状態からみて，Tammuz の代理を演じたのは王に外ならないと考え，対墓の伝統によって，中陵の2室に Urnammu と妻，東陵の2室に Shulgi (=Dungi) と妻，西陵の3室には Amarsin (=Bur-Sin) と妻および Shusin というように，Woolley とは異なった被葬者を想定したのである。

以上に述べたような Moortgat の解釈は，考古学的に確認された事実について，果して可能であろうか。これが次に検討しなければならない問題であるが，かれの説明には矛盾している点，あるいは事実に反することが，しばしば見受けられるのである。

まず最初に疑問に思う点は，Ur 第三王朝の「王陵」において，かれが対墓と考えた中陵の2室も東陵の2室も，上部建造物の床から墓室の天井にいたる穴をあけられていることである[27]。にもかかわらず，かれはこれらの墓室にそれぞれ Urnammu とその妻，Shulgi とその妻が葬られたものと想定している。かれの考え方によれば，復活す

るのは王だけで，王妃の遺骸は何人の手も触れないままで残っていなければならぬ筈であるから，この解釈は明らかに矛盾している。この誤りは各陵における2墓室を対墓と考えたところに由来しているように思われる。やはり Woolley が考えたように，1室には王が埋葬され，他の1室には殉葬者が埋められたものと理解する方が妥当であろう。

次に，Ur の「王墓」地においても，復活してぬけがらとなった墓の数と，女性が葬られていた墓の数とを比べてみると，これらの「王墓」を対墓として理解することが，いかに不自然であるかが容易にわかる。かれの解釈にしたがって，1050号墓の下半部には王が，上半部には女司祭が葬られたことを，また1054号墓の下半部には女司祭が，上半部には王が葬られたことを認めるとするならば，女が葬られた墓は，この2墓に800号墓を加えて3基となる。一方，王が葬られた墓は，この2墓に800号墓と対になる789号墓を加え，さらに墓室の天井に穴があけられるか，墓室が破壊されてしまった「王墓」として挙げられている580，777，779，1232，1236，1237，1332号墓の7基を加えると10基となって，両者のあいだに3：10という数の上での異常なアンバランスが生ずるのである。Moortgat の解釈によれば，女性を葬った墓は荒されることなく，そのままで残っていると考えられるから，その数と復活によって空になった墓の数とは同じであるべきものである。にもかかわらず，その数が王を葬った墓の数に比べて遙かに少いというのは納得できないことである。これは「王墓」が対墓として造営されたという考え方が誤っていることを示しているのではなかろうか。

さらに1050号墓と1054号墓の事実にかんする説明にも承認しがたい点がある。1050号墓では，前にのべた円筒印章の銘文から，下半部に王が葬られたことを認めるとしても，上半部に女性が葬られたことを示す証拠は痕跡さえない。また，1054号墓の上半部の墓室で発見された3体の木棺による埋葬は，すべて遺骸が残っていたのであるから，復活によって運びだされたということはありえない。したがって，この2墓が対墓の形式をふんでいるとは認められないのである。

さらにまた，王墓を対墓として理解するさいの基礎となった789号墓と800号墓の説明についても問題がある。先に述べたように，かれは800号墓の死坑から鋸と鑿とが発見された事実の解明を，後世の文献と円筒印章の図文とに求めた。後期 Assyria の文献のなかには，神が自由になるために，これらの道具でもって墓門を開く箇所があり，また Akkad 時代から Hammurabi 時代にいたる円筒印章には，右手に鋸をもって山から姿を現わしている図文がある。この山は彼岸の世界をあらわしているので，この図文は，手に鋸をもって墓から解放されようとしている場面だと主張する。そして，Kish

Y 地区の王墓が銅鋸と犠牲を伴なっている[28]ことから，銅鋸と「王墓」との関連性を強調し，さらに進んで KishY 地区の「王墓」は，Ur の「王墓」の先駆的な形態であるという。もしこの説明が正しいとするならば，かれの見解では，盗掘された「王墓」はない筈であるから，墓室が復活のために破壊されていた10基の「王墓」全部から，鋸と鑿が発見されねばならないのに，実際に発見されたのは，580 号墓からだけである。800 号墓の死坑から発見されたものを，もと 789 号墓に副葬されていたものと仮定しても，10墓中わずか 2 例にすぎない。

鋸と鑿とが当然あるべき「王墓」からの発見例が少い一方において，墓室をもたない民衆の墓にも，これが副葬品として収められていた例がある[29]。それは民衆の墓，千数百にたいしてわずかに 7 例であるから，「王墓」における10：2 の比率より発見の割合は，はるかに少いけれども，民衆の墓からも発見されたという事実は，これらの道具が墓室を開くために使用されたとは限らないことを示している。これらの墓が他の墓にくらべて副葬品が多い部類に属する点を考慮するならば，鋸と鑿の副葬は富者の埋葬における副葬品目の一つであったと考えるのが妥当であろう。580 号墓や 800 号墓に収められていた金製の道具類は，このような意味からも，王者にふさわしい副葬品ではなかろうか。また Kish Y 地区の王墓，Y 237，Y 357，Y 529 号墓には，数体の犠牲とともに，たしかに鋸が副葬されており，なおかつ天井が落ちていたけれども，被葬者は来世の生活での必需品をもって横たえられていたのである[30]。

なお竪穴に貴重な副葬品が残っていたことについての説明は，盗掘のさいに土のつまったところで，次から次へと貴重品をさがして掘り進めてゆくことが，よほど大がかりな盗掘でない限り不可能であろうと思われるのにたいして，墓室の場合には，それを掘りあてさえすれば，室内で自由に活動できる点を指摘すれば十分であろう。

以上に述べたことから，「王墓」を Tammuz 信仰で説明しようとする Moortgat の試みは，考古学的に認められた事実を相当に曲解することによって，はじめて成立しうるものであることがほぼ分っていただけたと思う。ところが実は，このほかに Moortgat が無視した重要な事実が残されているのである。

墓地において Woolley が「王墓」と認めたものは16基あった。Moortgat が対墓として，あるいは復活の痕跡を示すものとして挙げたのは11基にすぎない。その残された 5 基のうちから，この Tammuz 信仰説にとってもっとも都合の悪い事実が確認されているのである。5 基のうち，337 号墓は死坑であるから，Moortgat に 337 号墓はどう考えるかと質問するならば，それは 580 号墓，1237 号墓，1332 号墓と同よじうに，墓

室が破壊されたものと答えるであろう。1157号墓は，その位置と構造とから，1236号墓の一部と考えてよい[31]。しかしながら，規模が小さいにしても1618号墓，1648号墓の2基は被葬者が男であって，しかも復活によって運びだされていない[32]。この事実を無視することによってのみ，Moortgat の解釈は展開することができたのである。したがって，「王墓」を Tammuz 信仰でもって解釈することは誤りであると断言せざるをえない。そこで次には，Moortgat の解釈に，おそらくヒントを与えたと思われる Böhl の見解を検討してみよう。

## 4 女司祭説批判

まず Böhl は人間の犠牲が発見されたことで重要な3墓，789号墓，800号墓，1054号墓を問題にする。そのうち800号墓と1054号墓の被葬者が女性であることは確認されている。789号墓は盗掘されたとき，墓室の内部が攪乱されたために被葬者がわからなくなっていたが，Woolley が推測したような，王が埋葬されたという事実はもちろんのこと，被葬者が男であったことすら証明できないし，他の2墓から類推すると男であったということはありそうにないことだという。さらに800号墓で認められた事実から，これらの「王墓」にはすべて女性が葬られていたものと推測し，その女性は女司祭であったであろうと想定したのである。

800号墓の埋葬状態をみると，棺台に横たえられた女主人 Shub-ad の頭には，金の環，葉形，花形などを飾った特殊な頭飾が着けられており，また遺骸の付近にあった付属品や装身具などからみて，Shub-ad は盛装で葬られたものと推測される。ところが同じ棺台のうえに，Shub-ad の冠とならんで，第二のさらに豪華な冠があった。これは王冠であろうと思われるけれども，男の遺骸はない。したがって，この王冠は明らかに相手の男神の象徴である。このことから，墓は神聖な結婚式にさいして，神の花嫁に選ばれた女司祭が葬られたものであり，多くの殉葬者は，花嫁の随伴者たちであった。神との結婚において花嫁に選ばれることは，最高の名誉であるが，しかし同時に，それは死と埋葬とを意味するものであったという。

この結婚式の式次第について，Gudea の Cylinder B と Statue D が参照されている。Cylinder B には神 Ningirsu と天の娘 Ba'u との神聖な結婚についてかなり詳しい記述があり，そのなかに，結婚式に参列するものとして，戦士と高官，御者と聖なる車をともなったロバの牧人，羊飼，楽人，歌手，7人の女奴隷，Ba'u の双子の娘が挙げられており，結婚の贈物として，ロバと御者をともなった車，武器，皿，リラや装飾

品が見られる。Statue D では，贈物のなかに乗組員をともなった船が挙げられていて，789 号墓から発見された銀船がこれに当るのではなかろうかと思われる。また，結婚のとき，そこに置かれていた鉢から水が流れて，Tigris 河と Euphrates 河を満すという章句にたいしては，789 号墓の墓室と墳道から発見された排水溝がこれに相当するものと考えられる。そしてこの儀式の内容は，Ur の「王墓」において認められた事実との類似が顕著であると主張している。

さらに Isin 王朝の Idin-Dagan の時代の新年礼拝式にかんする記述によると，都市には王 (Tammuz) と女主人 (Innini) のための寝床のある部屋が建てられており，しかもそれは神殿の塔の上にある新婦の居間ではなくて，下界であり，新婦である女神は下界に休みにゆくところのヴィーナス星として称揚されているという事実をあげている。かくして，神聖なる結婚に参加したもののうち，花嫁とその随伴者たちだけが殺される運命にあったという訳である。

しかしながら，以上のような Böhl の考察は，ある部分においては事実を曲げて，ある部分においては，たんに一つの墓で認められたにすぎない事実を，あたかもすべての墓でもそうであったかのように解釈している点がいくつかある。

まず最初に問題にしなければならないのは，被葬者が女だけであるという考え方についてである。この解釈が事実に反するものであることについては，Moortgat の同様な解釈を批判したときに指摘しておいたので，ここでは繰返さない。ただし，男を葬ったことが確実に認められた 1618 号墓と 1648 号墓が発掘されたのは 1929 年末から 1930 年初めにかけてのシーズンだった[33]ので，Böhl がこの論文を執筆したときには，この事実はおそらくまだ知られていなかったと思われる。だが，男を葬った「王墓」が発見されたならば，この見解は訂正さるべきであるのに，Böhl 自身もそれを再検討していないし，この説の追随者たちにいたっては，その事実を知っておりながら，この点に少しも考慮を払っていない。

Böhl が「王墓」には女だけが葬られたと判断したのは，800 号墓と 1054 号墓において，女の被葬者が攪乱されずに残っていたことにもよるが，かれが Smith の神聖な結婚式による解釈を参照しながら，花嫁だけの埋葬を想定するにいたったのは，800 号墓で発見された第二の冠の存在に特別に重要な意味をもたせたからであった。しかしこのような余分の冠が発見されたのは 800 号墓だけであって，1054号墓にはなかったし，この 800 号墓の第二の冠を王のものと考えなければならない理由はない。冠の形からいえば女性用であってちっとも差支えない。また船が結婚の贈物であるならば，未盗掘の

800号墓と1054号墓からもそれが発見されてよい筈であるし，排水溝の解釈にいたっては牽強付会いがいの何物でもない。排水設備が儀式の進行に必須のものであるならば，789号墓だけでなく，その他の全部の「王墓」にもあって然るべき設備であるにもかかわらず，その存在が注意されていない墓がいくつかある[34]。

以上によって，Ur の「王墓」には女だけが埋められたという考え方は，遺跡で確認された重要な事実を無視した解釈であることがわかった。したがって，Böhl の女司祭説は成立しえないのであるが，Böhl がこのような解釈をとるにいたったのは，すなわち「王墓」の内容をもって，王が埋葬された墓であると考えることに疑をもったのは，もともと三つの理由からである。第一は「王墓」から発見された印章に認められる A-bar-gi あるいは Lugal-sā(g)-pad-da[35] なる王の名は Sumerian King-list には見当らない。第二は Sumer 人が来世の観念をもっていたことは文献資料においても，考古学的事実においても認められない。第三に王のために人間の犠牲が捧げられたという理解は困難である。この3点である。第二，第三の点は Böhl の発表より2年前に提出された Smith の反王墓説を踏襲したものであるから，Smith の説を紹介するときに詳しく述べることにして，第一の点について，ここで検討しておきたい。というのは，Böhl がはじめてこの事実を指摘したからである。これいごは，反王墓説に賛成するもので，女だけが埋められたと考えるものも，次にのべる Speiser, Frankfort のように，男女が埋められたと考えるものも，この事実をもって反王墓説の有力な根拠としている。

かれがこの論文を書いたとき使用しえた王名の資料は，A-bar-gi と Lugal-sā(g)-pad-da とがあった。これいごに，Lugal-sā(g)-pad-da を王名と考えることは間違っていることが分ったし，また Mes-kalam-dug と A-kalam-dug という王名の新発見が加えられたが，Sumerian King-list にこれらの名前が挙げられていないことに変りはない。したがって Böhl の指摘は現在でも正しい。しかしながら King-list に名前が挙げられていないという事実は，このことによって，その王の実在を疑う根拠にはならない筈である。このことは，次のような例を若干あげれば十分に説明のつくことだと思う。

Tello から発見された mace-head[36] に，Kish の王 Mesilim が神 Ningirsu のために奉納したと書かれているものがある。この Mesilim は Lagash の王 Entemena の円錐碑文[37]にも，Lagash と Umma の争を調停した Kish の王として登場しているのに，King-list にはみられない。Tello 発見の多くの奉納石板や mace-head にみえる Lagash の王 Ur-nanshe，社会改革をおこなったことで有名な Urukagina の名でさえ King-list は挙げていない。これらの若干例でも分るように Sumerian King-list は

すべての王朝と王たちを漏れなく記載してあるという性質のものではないのである。

## 5　司祭・女司祭説批判

Smith は「王墓」から発見された銘文に，被葬者が王であることを示す証拠がないことから，Woolley の王墓説は正しいかも知れないが，まずはじめに疑ってみる必要があると主張し，さらに王墓説が認められるためには，合理的な説明が当然あらねばならない事実として，2項目を挙げた。第一には，これらの墓の内容が示しているような高い文化段階では，王の死にさいして人間の犠牲を捧げるというような野蛮な行為は説明することが困難なのではないか。第二に，これが王墓であることを認めるならば，それは Sumer 人の間に来世への信仰があったことを示すものでなければならない筈であるのに，Sumer 人が来世観をもっていたとは信じられないということである。

そして，かれは Woolley が発掘によって明らかにし，往時の様相をいきいきと再現してみせた，ある種の儀式の説明を，Mesopotamia における古代の文献に求めて検討した結果として，かれ自身による次のような解釈の代案を提出した。すなわち「王墓」に葬られた人間は，新年豊饒祭のとき，地下の gigunu でおこなわれた筈の儀式において，神ならびに女神の代理人を演じた者であろうというのである。gigunu というのは，Smith によれば，塔の上と地下とにある部屋のことであって，そこには寝床が設けられており，新年豊饒祭において男神と女神が聖なる結婚の儀式をおこなう場所だという。さらに王墓の発見は，この地下の gigunu を掘りあてたものと仮定して，発見された諸事実について，次のような説明を試みている。.

(1) これらの墓の位置が，墓と同時代のものと考えられる囲壁の外側に近接している。囲壁付近は地下の gigunu があったと考えられる場所である。Kish でも Ziggurat の囲壁の近くで，「王墓」が発見されている。(2) 煉瓦構築の墓室で gigunu と一致する。(3) 多数の人間が埋められていて，そのなかには武装した兵士，晴着姿であったと思われる婦人，車などがある。女性の墓には櫂とハープがあり，これらは gigunu への行列が音楽をかなでながらおこなわれたことを示すものである。(4) 動物の犠牲も gigunu と関連するものと考えられる。(5) 棺台のうえに横たえられた婦人は頭飾をつけて花嫁衣装をまとったもので，かの女の側には夫のための頭飾がおかれている。これは，かれが殺される前にここを去ったことを示すものである。また多くの副葬品は花嫁へのプレゼントに相当する。(6) ここから発見された貝殻細工のスタンダードには，この儀式と関連のありそうな宴会の場面が表現されている。これは Sennacherib の

Festival House にかんする碑文から，宴会が新年豊饒祭の特色であることがわかるからである。(7) 同じ貝殻細工で動物が楽器をもち，一方では熊がダンスをしている場面がある。Ashurbanipal のフリーズには，猿をつれておどる男が表現されていて，動物が祭の行列に何らかの役割を果していたことが知られる。これもそのような宗教的な儀式が示されているのではなかろうか。

以上のような説明のあとで，「王墓」で認められた事実を gigunu との関係において，このように説明することが最良のものだとは思っていない，gigunu との関係をも考慮する価値が十分あることを示しただけである，と Smith は付け加えている。たしかに，これだけの説明では，「王墓」で発見された内容を神の結婚式の跡と考える根拠もまた薄弱である。にもかかわらずこの仮説の方が，「王墓」の説明としては合理的であると考えるものも多く，この説が継承され，また補足されて今日にいたっているのである。

Smith のこの論文が発表されたのは，The Journal of Royal Asiatic Society の1928年10月号であるから，Woolley が The Antiquaries Journal VIII, No.4 (October, 1928) に発表した概報は参照していないらしい。引用されている内容から判断して，大部分を 1928 年 6 月23日の The Illustrated London News に掲載された概報によったものと考えられる。The Antiquaries Journal には，問題になった，王を指す lugal，王妃を指す NIN という称号をもった名前が発見されたと明記されているからである。この概報が出され，また墓地の報告書が出版されて，王あるいは王妃の肩書をもつ名前の存在が明示されて[38]のちは，すなわち王墓説にたいする Smith の疑問の出発点が崩れてからは，司祭説にくみする学者たちは，別の解釈をとることによって，称号の問題を回避しようとしている。その一人は，先にのべたように，発見された王名が King-list にないことを指摘した Böhlであり，他の一人が H. Frankfort である。

Frankfort の主張はこうである。Smith の説では，新年豊饒祭において神を演じたものは殺されねばならないことになるが，文献記録の内容からみると，代理人が殺されたという証拠は何もない。ところが後期 Assyria 時代の文献をみると，新年豊饒祭において疑似王 mock king の存在を示すものがある。Ur の墓では Mes-kalam-dug という名前が２つの異なった「王墓」から発見されている。したがってこの Mes-kalam-dug というのは，特定の王の名前ではなくて mock king の職名であろうという。しかし，この説明でもなお，どのような種類の人間がこの役に選ばれたか分らない。

この点について新しい解釈をもちだしたのは E. A. Speiser であった。かれは Ur の「王墓」が新年豊饒祭における神聖なる結婚と関連するという Smith, Böhl, Frankfort

の見解を支持し，さらに問題の墓に埋められたものは王と王妃ではなくて，司祭と女司祭であると考えた。女だけが埋められたと考える Böhl は，それを女司祭と解釈していたが，男女が埋められたと考える立場において，これが司祭と女司祭であるというように社会的な身分と関連づけて，その被葬者を考えたのは Speiserが最初であった。そして他の反王墓説の学者たちと同じように， Mes-kalam-dug は lugal という称号を，Shub-ad は NIN という称号をもっているけれども，現在の Sumerian King-list には Mes-kalam-dug を含む王朝はみられないことを強調している。

このような司祭・女司祭説が， Ur の墓地における発掘の総合的な成果からみて，現在，妥当性をもつものかどうかを，次に検討しなければならない。 Woolley がすでに指摘しているように，これが新年豊饒祭として毎年おこなわれた儀式の跡であることを認めるならば，16の「王墓」では少なすぎるのではなかろうか[39]。司祭と女司祭とが毎年１人ずつ葬られたとして，８年間しかこの場所が使用されなかったことになる。もちろん他の年には未発見の他の場所を使用したものと考えれば良いことであるから，新年豊饒祭の跡という解釈を拒否する理由にはならないけれども，少し不自然なように思われる。

それはともかくとして，問題の墓を王墓と認めることに同意しない学者たちが，その根拠とするところは前にも述べたように，三つの重要な点からなっている。以下に，その根拠が信頼するに足りないものであることを述べておこう。

まず最初に， 王墓説への疑問の根幹をなす王の称号の問題をとりあげてみよう。Smith がこの疑問を提出したときには， 王であることを示す称号は発見されていないということであった。 Woolley がはじめに挙げた NIN という肩書だけでは，これらの墓をもって王と王妃の墓であると考える根拠として薄弱なわけであるが，その後，この称号にかんして重要な資料が発見された。それは “Mes-kalam-dug lugal” という銘をもつ円筒印章と “A-kalam-dug lugal-uri” という銘をもつ円筒印章とであって，後者の A-kalam-dug ははっきりと「Ur の王」という称号をもっている。しかもこれらの印章は Woolley のいう王墓の特徴を備えた墓から発見されたのである。Mes-kalam-dug lugal の銘をもつ印章が副葬されていたのは1054号墓であり，A-kalam-dug lugal-uri の銘をもつ印章が発見されたのは1050号墓であった。したがって，これらの「王墓」にこの名前をもつ王，あるいはその妃が埋葬された可能性は十分にあるわけである。

また Frankfort が指摘した， Mes-kalam-dug なる人物が２人いる事実も問題にしなければならない。同名の２人といっても，一方は lugal の称号をもち，他方は名前

だけである。lugal の称号をもっているのは前述の円筒印章の方であって，「王墓」の埋葬にさいして最後の段階に金の短剣とともに箱にいれて納められたものである。称号をもっていない Mes-kalam-dug の名がみとめられるのは，金鉢2個，銅鉢1個，金製ランプ1個であって，これらは全部755号墓から発見されたものである。755号墓は「王墓」以上に豪華な大量の副葬品をもちながら，煉瓦構築の墓室をもたず，犠牲をともなわない墓であるので，「王墓」には数えられていない。755号墓をもって779号墓に付属する埋葬と考えることも可能であるが，名前を印した器物がまったく性質のちがうものであるから，この両者をもって同一の役職名と考えるには，もっと多くの論証を必要とする。また Mes-kalam-dug を問題にすれば，とうぜん考慮しなければならない A-kalam-dug について，Frankfort は何もふれないで後期 Assyria 時代の文献によって Mes-kalam-dug が mock king の職名ではないかという仮説をたてた。今問題にしている時代は後期 Assyria 時代をさかのぼること約2000年の昔であるから，その当時に mock king があったと仮定するためには，もっと他の証拠が必要である。

Mes-kalam-dug と A-kalam-dug が王の称号をもっていると認める学者にも，これらの名が Sumerian King-list に記載されていないという理由から，王名を刻んだ印章が発見された「王墓」を王あるいは王妃の墓と認めないものがあることは先に述べたとおりである。またこの理由が王墓を否定する根拠となりがたいことについても Böhl の項で述べたので，ここでは省略する。

第二に殉葬の問題をとりあげる。王の葬送にさいして，多数の殉葬をおこなったという記述が，Sumer の文献のみならず Babylonia の文献にも見られないことを，司祭説を主張する学者はひとしく強調する。そしてすでに知られていた Assyria の王の墓には，人間の犠牲がささげられた形跡はなく，Sennacherib のため人間の大虐殺がおこなわれたのは，かれが殺された場所においてであって，かれの墓ではなかったと主張する。しかしこの主張はおかしい。王の葬送にかんする記録があって，しかもなおかつ殉葬がおこなわれた記録がないというのならば，この理由も王墓反対説の有力な根拠となりうるけれども，げんざい発見されている限りでは，この根拠となりうるほど詳しい王の葬送にかんする記述は見当らないのである[40]。また Ashurbanipal がおこなった大虐殺は Sennacherib が毒殺されたための報復という特殊な場合であって，王のふつうの葬送儀式とは無関係のものである。

最後に Sumer 人の来世観について述べよう。Smith をはじめ Böhl, Speiser, Frankfort などの反王墓説の学者の大部分は，Sumer 人に来世への信仰がなかったど

とくに述べているけれども，Sumer 人は彼岸の世界を考えなかったのではない。Sumer 人の来世観の内容が研究されるようになったのはとくに S. N. Kramer 教授に負うところが大きく[41]，しかもごく最近のことであるが，「王墓」が発見された1927年頃においても，かれらが来世への信仰をたしかにもっていたことはわかっていた。Sumer 世界に起源をもつ Gilgamesh Epic のなかに[42]，死者が行く国について，その国は「帰り路なき土地」であり，永遠の暗黒が支配するところで，塵が死者の食物であり，泥がかれらの飲物であるというように，非常に陰惨な，かつじめじめした世界として叙述されている。Egypt の彼岸とは何という違いであろう。当時においては，この記述がとくに強調されて，Babylonia 人や Sumer 人は来世にほとんど希望をもっていなかったというふうに理解されていたし，現在においても，このような解釈が一般にみとめられている。しかしながら，ここで注意しなければならないことは，死後にゆく世界が，帰り路なき土地で，しかも永遠の暗黒が支配するような陰惨な国であっても，この記述は人間が死ぬと他の世界にゆくという信仰があった，すなわち彼岸の世界が存在するものと信じていたことを示すものに外ならない。彼岸の世界はつねに楽園である必要はないのである。

Smith が最初に提案し，さらに他の学者たちが賛成した反王墓説を支える三つの根拠について，以上のごとく検討してみると，ほとんど根拠とするに足りない事実ばかりであることがわかった。ここにいたって注意しなければならないのは，Smith が疑問を提出したさいの慎重な考慮についてである。そのとき Smith は次のごとく述べている。これらの墓を王墓と考え，人間の犠牲の風習を Scythian との類似で説明することは恐らく正しいであろう。だが考古学的な比較はできるだけ慎重でなければならないし，さらにまた Babylonia の信仰にかんする知識ともマッチするものでなければならない。このような観点から，新年豊饒祭の聖なる結婚式によって，「王墓」の内容を解釈することが試みられたのであった。かれが仮説を提出したときには，その仮説に基づいて王墓説を批判してきた追随者たちより遙かに慎重な考慮が払われていたのである。

このようにして，王墓説に対する疑問の根拠が薄弱なものであることが認められると，Smith が gigunu でおこなわれた儀式であることを説明するために列挙した根拠は，この儀式にのみ特徴的なものである必要はないことになる。「王墓」が発見された囲壁外側の隣接地は Uruk 期あるいは Jemdet Naṣr 期いらいの墓地であり[43]，Ur 第三王朝時代にも王陵が建造された場所である。埋葬施設としての煉瓦構築の墓室は Sumer でも決して珍しいものではない。Kish の「王墓」いがいの墓でも煉瓦造りであるし，Eridu では約 1000 の Uruk 期の煉瓦造りの墓が発見されている。

武装した兵士，盛装の婦人などの行列が車を引いて音楽を奏しながら行進するのは，gigunu の儀式のときばかりではなかったであろう。動物の犠牲も同様である。Ur 第三王朝時代には，王の葬送に車が使用されていたことを示す文献さえある[44]。女司祭といわれた 800 号墓の被葬者は，発見品から判断すると盛装していたには違いないが，花嫁であるという証拠はない。人骨の測定の結果では，40才前後の婦人だといわれる[45]。この婦人の側で発見された頭飾を，殺される前に去った夫が残したものと考えているけれども，Böhl の項で述べたように，この解釈にも何ら根拠はない。スタンダードとハープには，何らかの儀式と関連がありそうな場面が表現されているが，これらの器物がその儀式にだけ使用する目的をもって作られたものでない限り，その表現をもって，「王墓」で認められた儀式を解釈する場合の根拠として使用することは不適当であろう。儀式といっても，新年豊饒祭ばかりではなかろう。

## 6 王墓説の妥当性

Ur の「王墓」の被葬者が司祭と女司祭であるとか，女司祭だけであるとか，さらにまた Tammuz 信仰にもとづいて埋められたものであるとかの解釈は，以上の各項で指摘したように，科学的な発掘によって認められた事実を誤認したり，曲解したり，さらに重要なことには，それぞれの解釈に都合の悪い事実を無視して構成されている点が認められた。もちろん，Woolley によって発表された事実が，すべてについて絶対的に正しいものであるとは限らない。考古学上の発掘技術にも進歩がある。それによって，従来は問題になしえなかった，いっそう複雑な問題をも追求してゆくことが可能となるのである。したがって，考古学的に認められた事実といえども，絶えず批判的に検討してゆかねばならないことは勿論であるが，その場合には，いっそう正確に認められた，他の発掘でのそれに相当する事実を呈示する必要がある。現在の問題にかんする新説の提唱者たちのなかで，Ur の墓地で Woolley が認めた事実と異なる事実に立脚して新見解を発表したかれらは，新しく確認された考古学的事実を呈示しているのであろうか。決してそうとは認められないのである。

ひるがえって，Woolley の王墓説にどれだけの確証があるかというと，かれが挙げた証拠だけでは王墓であることが実証されたとはいえない。印章の銘にあっても，被葬者にともなって発見されたのは，NIN という称号をもつ Shub-ad の名を印した円筒印章だけである。lugal という称号をもつ印章は，1054 号墓の上部構造の箱のなかから金の短剣とともに発見され，lugal-uri の称号をもつそれは 1050 号墓の下部構造の墓床

から発見されていて，「王墓」の墓室のなかから，被葬者にともなって発見されたことがない。したがって，問題の墓は「王墓」である可能性はあるけれども，確証はないということになるのである。

Smith は「王墓」が発見されたとき，これを王の墓と認めることを躊躇する二つの理由をあげた。前項で述べたように，それは人間の犠牲が Sumer の文献にみあたらないこと，Sumer 人には来世にかんする信仰がなかったと考えられることである。この二つの理由が大した根拠のないものであることもすでに述べたとおりであるが，Woolley の終生の努力にもかかわらず，反王墓説の学者たちを説得することができなかったのは，Woolley 自身が Sumer 人には彼岸の信仰がなかったという考え方を，最後までもっていたことにも一因があるように思われる[46]。そのために，かれは Ur 第三王朝の王陵を，その被葬者である王が生存中に神格化されていたことによる例外的は存在であると考えた。そしてこの王陵の先駆的な意味をもつものが，いわゆる「王墓」であり，被葬者の王や王妃がすでに半神となっていたであろうと推測することによって，特殊な葬法による埋葬の説明をすませようとした。被葬者たちは半神であるから，庶民の墓とちがって部屋をつくり，屋根をふいた家のなかに，男女の従者たちをしたがえて眠っているのは当然であると解釈したのであった。さらに従者たちは神にしたがうのであるから，かれらを犠牲とよぶのは適切でないと強調している。しかし，これは適切な説明ではない。

Smith の出発点にかえると，来世信仰と犠牲にかんして合理的な説明ができるならば，問題の墓を王墓と認めてよいであろう。Sumer 人の来世信仰の内容にかんしては，まだほとんど分っていないけれども，かれらが来世の存在を信じていたことだけは間違いない事実である。このことについては前項ですでに述べたので，ここでは犠牲の問題について検討してみたい。

Moortgat によると，人間の犠牲は野蛮な行為で，Ur 第一王朝のように高い文化の時代にはありえないものであるという。Böhl も人間の犠牲を問題にして，これは先史時代にしか現われないものであるという風に理解しているし，C. J. Gadd や G. Contenau はこの風習が Scythian あるいはもっと広くユーラシア遊牧民に由来するもので，Mesopotamia 文明にとっては異質的な，したがって一時的に認められる現象であると考えている[47]。果してそうであろうか。

自由と独立を生活の重要な目標とする近代人からみれば，王あるいは王妃の死にさいして，従者が主人のために殉死するということは，たしかに野蛮な行為に違いない。し

かしながら，殉死の風習は野蛮な先史時代に現われるものではないし，またある特定の民族に固有な風習でもない。インドでは夫の死にさいして妻が殉死する風習，いわゆる sati が英国支配いぜんまで一般におこなわれていたし，日本においても，主人の死に殉じて近臣が従う風習が江戸時代にあったことは周知の事実である。かえって先史時代には，そのような風習が少いのではなかろうか。Mesopotamia においてこの風習が認められるのは，現在までに発見された資料にかんする限り，初期王朝期の初頭から Ur 第三王朝時代までであって，Mesopotamia 文明の形成期にあたっている。Egypt においても顕著な殉葬が認められるのは第一王朝以後であって，多くの先史時代墓地からは，殉葬の事実は報告されていない。中国でも殉葬の風習が認められるのは商代いごであるように，どの地域においても，殉葬の風習は古代文明の形成期ないし高揚期から流行しはじめているようである。それは支配者ないしは支配階級の発生と密接な関係をもっているように考えられるのである。

この Mesopotamia の殉葬は外来の異風の影響によって生じたという考え方がかなり強い。しかしながら，殉葬の問題が論じられるときによく引合にだされる Scythian の殉葬の風習は，最古のものでも前1千年紀の後半をさかのぼることはできないのであるから[48]，Ur の王墓の方が遙かに古い。紀元前3千年紀における Scythian の風習は，まったく知られていない。したがって，この風習の由来を Scythian に求めることはできないのである。その年代からいって，Mesopotamia に影響を与えた可能性のあるのは Egypt であるが，Ur の墓地からはそれを証明する材料は発見されていない[49]。

さらに，Ur の王墓における殉葬の風習は決して特異なものでないことが認められたとしても，一方において，Mesopotamia では王墓そのものが例外的な存在であると考えられることがある。Woolley もそう考えている。しかし，これは Mesopotamia における発掘が，主として都市の中心部の神殿に限られていたこと，さらに大体において墓には，目じるしになるような建造物が地上に残っていないことに原因がある。Mesopotamia の都市に墓地がなかった訳ではない。先にも述べたように，Ur の墓地も Uruk 期から Jemdet Nasr 期と続いた墓地のうえに，問題の墓地が営まれていたのであり，その後も Sargon 時代から Ur 第三王朝時代まで使用されている。Lagash では Urukagina の改革碑文[50]から，墓地の存在を知ることができるが，その墓地は埋葬料の高低によって2種類に区別されていたのである。神話のなかには，Gilgamesh が他界にゆくとき，近親や従者をともなっていたことを推測させる章句も発見されている[51]。もっと多くの墓地が発見されれば，王墓の例も加わって，Ur の王墓が例外的な存在でなくなるときが必ず来るものと思われる。

（筆者は京大文学部助手）

## 註

1) この論文の内容は1961年3月，京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得者研究発表の席で，「ウル「王墓」の被葬者について」と題して発表したものをもととして，その後の研究成果を加えたものである。主題が Mesopotamia の宗教にも関連するために，必要欠くべからざる文献的研究について，大学院在学中から今日にいたるまで中原教授からとくに懇切な御指導をうけた。中原教授の御退官にさいし，その研究成果をまとめてここに献呈したい。また中原教授からはもちろんのこと，梅原末治教授からも貴重な書物を拝借したし，有光教一教授からは御教示をいただいた。感謝の意を表したい。

2) Woolley: Excavations at Ur, 1927-8 (The Antiquaries Journal, VII, 1928, p. 446).

3) Sidney Smith: Assyriological Notes—A Babylonian Fertility Cult (JRAS=The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1928 pp. 849—875).

4) C. J. Gadd: The Cities of Babylonia (The Cambridge Ancient History), 1962, pp. 47—48.

5) Antiquaries Journal, VIII, No. 1, 1928, pp. 1—18.

6) Antiquaries Journal, VIII, No. 4, 1928, pp. 415—447.

7) Ibid., pp. 419, 429—431.

8) Ibid., pp. 422—423.

9) Ibid., p. 419.

10) Ibid., pp. 423—426.

11) JRAS, 1928, pp. 863—868.

12) Böhl: Das Menschenopfer bei den alten Sumerern (Z. A.=Zeitschrift für Assyriologie, N. F. 5 (39), 1930, pp. 83—98).

13) 「王墓」といっても，王妃が埋められた墓を含んでいる。この点を考慮にいれて「王族」あるいは「王家」とよぶことも試みられているけれども，王子を葬った墓ではないかと推測されている755号墓のような例があるため，「王族」とか「王家」の呼名はともに適切でないばかりか誤解を招く恐れさえあるので，ここでは使用しない。王妃の墓を含むのであるから，「王墓」というのは，名称として，正しく内容を表わしているとはいえないけれども，そのなかに王妃の墓も含ませることにしておく。

14) Ur Excavations, II, pp. 38—39.

15) Antiquity, VIII, 1934, pp. 448—451.

16) JRAS, 1937, pp. 341—343.

17) Frankfort: Kingship and the Gods, Chicago, 1948, p. 400 n. 12.

18) Moortgat: Tammuz, Berlin, 1949, pp. 54—71.

19) Sumer 人の間では Dumuzi とよばれたが，一般には Akkad 系のよび名によってこうよばれている。

20) 例えば H. Schmökel : Geschichte des alten Vorderasien, Leiden, 1957 ; Das Land Sumer, 1956 等。

21) Woolley : Excavations at Ur, pp. 77—84.

22) Perry : Sumer and Egypt (Man XXIX, 1929, No. 18).

Childe : New Light on the Most Ancient East, London, 1952, p. 154.

Contenau : La Civilisation d'Assur et de Babylone, Paris, 1951, p. 253.

Delaporte : Le Proch Orient Asiatique (Les Peuples de l'Orient Méditerranéen).

W. Speiser : Vorderasiatische Kunst, Berlin, 1952, p. 40.

Pallis : Chronology of the Shub-ad Culture, 1941, pp. 164–165 ; The Antiquity of Iraq, Copenhagen, 1956 p. 686.

Gadd : The Spirit of Living Sacrifices in Tombs (Iraq XXII, 1960, p. 51).

Parrot : Sumer (L'Univers des Formes), 1960, pp. 159—160.

Moscati : The Face of the Ancient Orient, 1960, p. 53.

Kramer : The Sumerians, Chicago, 1963, p. 129.

23) Smith : JRAS, 1928, pp. 863—868.

Böhl : Z. A., N. F. 5(39), 1930, pp. 83—98.

Menghin : Weltgeschichte der Steinzeit, 1931, p. 437.

Frankfort : JRAS, 1937,p p. 341—343 ; Kingship and the Gods, p. 400.

Lloyd : Mesopotamia—Excavations at Sumerian Sites, London, 1936, p. 156.

Speiser : Antiquity, VIII, 1934, pp. 448—451.

Moortgat : Tammuz, Berlin, 1949, pp. 54—71 ; A. Scharff und A. Moortgat : Ägypten und Vorderasien in Altertum, München, 1959, pp. 248—255.

Schmökel : Geschichte des alten Vorderasien, p. 37 ; Das Land Sumer, p. 152.

Beek : Atlas of Mesopotamia, Nelson, 1962, pp. 36, 54.

24) 『西南アジア研究』, No. 8. 1962, pp. 5—28. 以下の記述においてしばしば問題にする 789, 800, 1054 号墓, Ur 第三王朝の王陵については，この論文の挿図を参照していただきたい。

25) なお Ur の「王墓」の被葬者をめぐる他の一つの大きな問題は，王墓説をとると否とにかかわらず，「王墓」の被葬者が Ur 第一王朝時代のものであるか否かという問題である。いずれの立場にも証拠はないが，この問題は Sumerian King-list にあげられている王朝をどう評価するか，さらには初期王朝期の Sumer 都市国家間の関係をどう理解するかという問題とも関連するので，別の機会にゆずりたい。

26) Moortgat : Tammuz, pp. 55—56.

27) Antiquaries Journal, XI, No. 4, 1931, pp. 350, 355, 356.

28) L. Ch. Watelin : Excavations at Kish, Vol. IV, 1934, p. 24.

29) Ur Excavations, II, pp. 412–482.

30) Watelin : Excavations at Kish, Vol. IV, pp. 18–19.

31) Ur Excavations, II, p. 170, pl. 273.

32) Ur Excavations, II, pp. 128–130, 133–134. 1631号墓は荒されているけれども (Ur Excavations II, p. 130), Moortgat はこの墓について述べていない。

33) Antiquaries Journal, X, No. 4, 1930, p. 324.

34) 777, 779, 1050, 1236号墓。Ur Excavations, II, pp. 53–62, 91–97, 111–113.

35) はじめ789号墓の被葬者は Lugal-sā(g)-pad-da ではないかと考えられたが，のちに訂正された (Antiquaries Journal, VIII, p. 439 ; IX, p. 341)。

36) A. Parrot : Tello, Paris, 1948, p. 72 ; F. Thureau-Dangin : Die Sumerischen und Akkadischen Königsinschriften, 1907, pp. 160–161.

37) F. Thureau-Dangin : Ibid., pp. 36–41.

38) Ur Excavations, II, pp. 38—40.

39) Woolley : Excavations at Ur, p. 79.

40) Kramer : The Sumerians, p. 129.

41) Kramer : Death and Nether World according to the Sumerian Literary Texts (Iraq XXII) ; The Sumerians, pp. 130–135.

42) R. Campbell Thompson : The Epic of Gilgamish, 1928.

43) Woolley : Ur Excavations, IV.

44) G. Castellino : Urnammu three Religious Texts. (Z. A., N. F. 18(52), 1957. p. 22)

45) Ur Excavations, II, p. 400.

46) Woolley : Antiquaries Journal, VIII, p. 426 ; Excavations at Ur, pp. 80–81.

47) C. J. Gadd : The Spirit of Living Sacrifices in Tombs (Iraq XXII, pp. 51–58) ; G. Contenau : Manuel d'Archéologie orientale, III, p. 1557.

48) E. H. Minns : Scythians and Greeks, Cambridge, 1913 ; A. Mongait : Archaeology in the U. S. S. R., Moscow, 1959, p. 158.

49) 『西南アジア研究』, No. 8, pp. 21–22.

50) 中原与茂九郎：シューメル法に就いて（紀元二千六百年記念史学論文集), p. 741.

51) Kramer : The Sumerians, p. 130.